



ホームページアドレス <http://www1.com.ne.jp/~mizumaki>

発行・カトリック水巻教会  
編集・広報委員会  
遠賀郡水巻町頃末南1丁目35-3  
〒807-0025  
TEL 093(201)0680 FAX(201)7354  
第308号

## 社会問題と教会

広報 岩本

数年前から日本司教団は様々な社会問題に関する具体的な提案の声明を出し、ブックレットなどの冊子を発行していますが読んだことがあるでしょうか。

「なぜ教会は社会問題にかかわるのか」という冊子は、全員がこれを購入して読むということは不可能ですから、水巻教会の「からしだね」では分かりやすい内容の部分を選択して掲載して読んでいただいています。

昨年、司教団は「いますぐ原発の廃止を」というメッセージを出しました。現代日本社会の電力事情は原子力発電があることが前提になっています。北九州に住んでいる人たちの中には、大量に電力を消費する会社に勤めている人がかなりいます。鉄鋼や化学の会社は、みんな大量の電気が必要なのです。電力が足りないことになり、電気料金が上がると、このような会社で働いている人の雇用が危なくなります。理想だけで解決しない問題もありながら、どのような判断をするのか、難しい問題です。

九月に教区信徒協は研修会を行いました。今回は宮原司教が司教団メッセージの解説を行い、その内容をもとに分ち合いが行われました。その時の記録を読みたい人は地区信徒協にありますので役員に頼んでみてはどうでしょうか。1月13

日には恒例の司祭との懇談会がありましたが、今回は教区研修会の報告を受けて分ち合いが行われました。この内容については「北九州地区信徒協たより」に要約が掲載されますので読んでください。

今年の懇談会では「なぜ、今まで教会は社会問題について発言してこなかったのか」という質問も出されました。しかし、教会は「第二バチカン公会議」で様々な文書、たとえば「現代世界憲章」を1966年に発表して、社会問題について指針を出しています。その後もバチカンも日本司教団も様々な提言を出しています。私たちが勉強しないので知らないのです。社会問題と教会の教えは別ではありません。

イエス様はその時代の社会の中に神様の教えを伝え、神の教えに基づいて間違っていることを正されました。

水巻教会からの参加者は、教区研修会1名、地区懇談会は2名でした。

社会問題に向き合う・・・	2・3・4面
ひさし、今、いけ・・・	5・6面
聖書への案内・・・	6面
レプトン会一日黙想会の報告・・・	7面
今月の聖人・・・	7面
おしらせ・・・	8面
短歌・・・	8面

## 社会問題に向き合うカトリック教会の基本姿勢

Q6 教会に属する者は、社会問題についてそれぞれどのようにかわるのですか？

A 教会は、キリストを信じて洗礼を受けた人々の共同体です。彼らは皆、神のこゝばを告げ（預言職）、神と人を愛するために自分を神に差し出し（祭司職）、人類社会を神の意に沿って刷新する（王職）というキリストの働きに参加するよう招かれています。ただし、各自は、自分が神から受けた召命に応じた形で参加します。ある者は叙階の秘跡によって司教、司祭、助祭という聖なる奉仕者とされ、ほかのキリスト者は信徒と呼ばれます。また、聖職者と信徒の双方から神によって招かれ、福音的勧告（清貧、貞潔、従順）の誓願による特別な方法で神に奉獻されたキリスト者は修道者と呼ばれます。

信徒は、キリスト者としての良心と福音の価値観に従って、市民としての義務を果たしながら、この世にその価値観を浸透させるという使命を果たします。同時に、信徒はこの世のことがらを神の望みに沿うかぎり尊重し、自分に与えられた能力と責任をもって他の市民と協力します。しかし、教会は、必要と認める場合は、世俗的なことがらに対して信仰に基づいて道徳的判断を下す権利と義務を行使します。キリスト者は、政治に参画するとき、「政治は人間の尊厳と人間の真の発展に奉仕する」という原理を尊重します。科学技術の進歩に伴う問題に対しては、道徳的原理を一貫して尊重する態度が必要です。人間のいのち

の尊厳を否定するような法案に関して、キリスト者には、人のいのちに関するより深い理解とすべての人がこのことについてもっている責任について、社会にあらためて思い起こさせる権利と義務があります。結局、「信徒は、二つの並行した生活をしているわけではありません。（中略）キリストであるぶどうの木につながった枝は、すべての領域の存在と活動において実を結びます。実際、信徒の生活のあらゆる分野が神の計画の中に入っています。神は、そのあらゆる分野が、御父の栄光と他者への奉仕のためにキリストの愛が表され、実行される『場』となることを望んでいます。仕事上の能力と連帯、家庭における愛と献身、子どもたちの教育、社会奉仕と公共生活、文化の領域における真理の促進など、すべての活動、状況、実際的な責務はみな、『信仰、希望、愛の絶えざる実践』のための摂理的な機会なのです」。

奉獻生活に召された人々も、福音的勧告に従う生活を通してイエスの使命を続けるためにこの世に派遣されています。彼らは、現代の出来事に積極的にかわることによって、神の計画に従って働くようにとの神の招きを聖霊の助けによって識別し、世界の新たな問題に対して答えを出すよう招かれています。とくに、飢えや暴力や差別などでゆがめられた兄弟姉妹の顔に神の顔を見て、世話をするよう駆り立てら

れます。非常に弱い立場に置かれているために貧しくされた人々、心と身体の病で苦しんでいる人々、教育を受けられずにいる人々に奉仕して、神と兄弟姉妹に完全にささげられた生き方をあかしします。キリストへの愛ゆえに清貧の生活を送り、交わりの生活とすべての人との対話を通して、貧しい人々の権利を擁護し、不正を告発し、正義の促進のために尽力することができます。彼らは、文化を担い、福音によって変容させ、成長させることにも貢献します。

聖職者は、本来、永遠の愛のいのちをあかしし分かち与える者でなければなりません。したがって、「国家権力の行使への参与を伴う公職を受諾することは禁じられ」<sup>○</sup>ており、原則として「政党および組合の指導に積極的に関与してはならない」<sup>○</sup>のです。しかし、一市民として、福音の精神と教会の社会教説に従って社会の建設と生活に参与し、寄与しなければなりません。牧者としても自国の秩序と正しい法律を守るよい手本とならなければなりません。また、人々の政治や経済にかかわる実生活と生活条件に無関心なら、人々に奉仕することはできません。何よりも、司教は、司祭たちとともに、信徒のあらゆる活動が福音の光で照らされるように教えなければなりません。司牧者の任務は、「創造の目的とこの世の使用に関する原則を明らかにし、この世のことがらの秩序がキリストにおいて刷新されるよう道徳的、霊的な助けを与えること」にあります。聖職者はまた、

人々の間に正義に基づく平和と調和を保ち続けるようつねに最大限の努力をしなければなりません。司祭には、信徒が教会だけでなく社会の中でそれぞれの立場で果たすべき使命を認め推進する責任があります。

教皇ヨハネ・パウロ二世は、司教に関する使徒的勧告『神の民の牧者』（二〇〇三年）の中で次のように述べています。世界の至るところで、戦争やさまざまな不公平の結果、貧しい人々と豊かな人々との差は深刻になり、子どもや青年、女性たちはますます悲惨な生活に追い込まれています。司教は、このような人々の「人間としての権利の擁護者」です。司教は、教会の倫理に関する教えを宣言して、いのちを受精の瞬間から自然の死まで守ります。



司教は、テロ、民族や国民の抹殺を断固罪悪とみなし、不正に泣き叫んでいる人々、迫害されている人々、仕事に就けない人々、暴力や性虐待を受け、労働や兵役を強制されている子どもたちのために声を上げます。神との一致および全人類の一致の秘跡である教会と同じように、司教は、正義と人権に深い関心をもって貧しい人々を父親のように守り、希望を与えます。

司教は、多くの惨事を前にして目をつむることはできません。資源を公正に分かち合うことができる時代でありながら飢えと貧しさに苦しむ人がいることについて、黙っていることはできません。戦争や圧政

や経済的な差別のために避難や移住を余儀なくされている人々と連帯することを表明しなければなりません。マラリアやエイズ、非識字、希望のないストリートチルドレン、性の商品化、暴力のための宗教の利用、麻薬や武器の売買などを前にして、救いの手立てを考えなければなりません(詩編 12・6 参照)。

このような状況は、今すぐ平和を訴え、力を合わせてともに平和を築くよう招いています。教会は、「平和を実現する人々は幸い」(マタイ 5・9)といわれたキリストの平和を宣言し続けます。平和は、毎日の生活を織りなすさまざまな小さな行いを通して果たされる責任です。平和は、それを告げる人と造る人を待っています。そのような人々は、キリスト教共同体の中にはいるはずで、その共同体の牧者は司教です。司教は、「圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるため」(ルカ 4・19)に来られた主イエスに倣い、キリスト者は個人と社会の全体的な発展をも強く望んでいるということを示します。武力紛争のあるときには、権利の主張を勧めながらも、キリスト者はどのような場合にも復讐をせず、敵をゆるし愛するように努力すべきであることを思い起こさせます。本当の平和は、ゆるしを通してのみ可能だからです。

情報技術の驚異的な進歩のおかげで経済や文化の面で世界が一つになりつつあります。しかし、取り残される人々も少なくありません。司教は、人格の尊厳と連帯

と補完性の原理を尊重しつつ、愛のわざを世界に広げなければなりません。債務帳消しは、その一つの方法です。

世界的な視野に立って自然環境と資源を守ることも必要です。それは人類の存亡にかかわることです。環境破壊は、経済的な利益だけが追求されて、いのちが尊重されていない結果です。いのちを守るといって人間の心の環境こそ第一に考えるべきものです。創造主は、人間を天地万物の管理人としてその中心に置かれたからです。司教はそれを教える義務があります。

司教は、「いのちの福音」を告げる義務をも与えられています。人々の心と身体健康増進のため働く人々を司牧することも考えなければなりません。受精から死に至るまでのいのちの軽視(人工妊娠中絶や安楽死) および家庭の軽視に対して、司教は断固反対し、家庭が「家の教会」となるよう推進しなければなりません。

司教はまた、武力紛争、不安定な経済状況、政治的、民族的、社会的紛争、自然災害などの理由で避難や移住を余儀なくされている人々のためにも、牧者としてそれぞれの事情に合った世話をしなければなりません。

世界とその問題、挑戦、そして希望を受け止めることは、司教が身を挺して希望の福音を宣言することに含まれています。司教は「希望の人」でなければならないのです。





## ひさし、今、行け！

—宣教の難しさと大切さ—



主タイトルに上げた奇妙なセリフは、私が中・高校生頃（愛媛・宇和島時代）に、母が私に、1週間に約1回言ったセリフであり、詳しく言うなら、「今、じいさんが裏に引っ込んだので、今のうち、早く教会に行け」という意味です。そのように、「我が家は仏教である」という祖父の目を盗んで、私は教会に通っていました。教会は、幸も不幸もその家に非常に近く、教会の庭に居るところを見られる恐れもありました。

私が小学生時代は、その家に住んでおらず、そこには祖父と祖母だけが住んでいたのですが、小学生の私は教会で公教要理を習った帰りに、楽しげにその家に行き、ある部屋でなにげなく要理の本を読んでいたら、訪れていた叔母が見つke、「おじいさんに見つかったら大変なことになるから、早くしまいなさい」と叱られたものでした。

いきなり、現在に話を向けますが、水巻教会のメンバーには、その経験が先のような状況と正反対で、先代からカトリック教徒である方が多い様です。私が最も言いたいことは、このことでなく次のことで、すべての水巻教会のメンバーがそうであればいいのですが、信徒に女性の方が非常に多いということは、ご主人、ご主人の家系が信者でなく、気兼ねしながら、不運であれば、隠れながら教会に通う状況が生じているのではと推測されます。教会にはそれについての配慮が必要と思われる。不遜とは存じますが、長崎には信者が多いゆえに、長崎の方が「隠れキリシタンの苦勞」を知らず、家族というものはカトリック信者の集団であると思われるのでは、と考えてしまいます。

私の経験は先の話だけに留まりません。私の妻の家（妻以外）の人々は、偶然に、多くがカトリック信者か関係者だったのですが、ほとんどが、バチカン公会議以前の封建的な気風に嫌気がさしたり、聖堂での古参信者家族の特等席に呆れたり、神父の発言に傷付いたりして、教会からの遠心力ばかりが働いてきたようです。結婚したばかりの私が、義母に「教会に行きましょう」としばしば言いましたが、それは余りに無神経なものだったようで、「辛くなるので、それだけは言わないで。」と言われたものです。

さて、私は青年時代、所属大学の学生のためのYMCA寮に居り、プロテスタントの有り様をも知って、私は、カトリックでは「信徒である条件は緩く、家族で代々信者であることを受け継ぐ」、プロテスタントでは「教会維持費1つ取ってみても高額で、個人が判断して教会員になる。牧師を中心に理想は高く、着いてゆけなくて教会を去るケースも多い」と見て、カトリックの方を自慢していました。

プロテスタントに比べて家族伝道型のカトリックは、これまでは多子の時代であったことと、カトリック信徒ならではの多産の方も居て、教会人口維持が成り立っていたのではと思

います。昨今、少子化時代の訪れと共に（子供が産める年齢の女性の出産人数は、戦後から20年置きに4.3→2.1→1.8→1.3人）；カトリックは、精神的活力の乏しい地方の教会を中心に、信徒でない人に伝道しようというプロテスタントに、水を開けられるのではと思うのです。（それでも信者増加数があるのは日本の国際化のためでしょう。）1年前、古賀市のプロテスタント教会の礼拝に参加しましたが、そこに居たのは約30名の所属信徒と、約20名の近隣の看護大学の女子学生（多分、ほとんどが信者ではない）でした。臨機に福音を求めてくる人が6割も居るのです！

やはり、プロテスタントの伝道に倣い、私など、おそらくカトリック信徒がしばしば蔑視してきた小規模宗派の自宅訪問、・・・これをせよ、とは言いませんが、それを軽蔑することは決してできないことを理解し、総じて福音宣教の必要性を考えるべきと思います。イエスの伝道は、信徒としては真っ白だった人間を、弟子として集められたのであって、そもそも信徒であった弟子が居て、その家族を養成したのでは、ないでしょう。

・・・とは言え、現在の私自身は、一応は家の主人となっているにも関わらず、やることなすこと、誇れる状況からほど遠い人間ですが。万一、以上の文章に良い文脈があれば、汲み取って頂きたい、と言うに過ぎません。

三谷 尚（名前は「ひさし」）



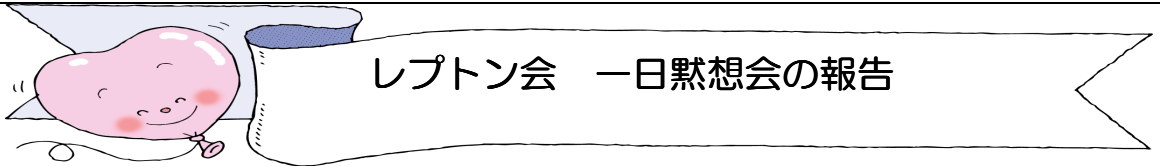
### 聖書への案内 No.34 ヘブライ人への手紙

整った文体と美しいギリシャ語で書かれた文書として、新約聖書の最も優れた文書の一つと言われていますが、手紙と言うよりも説教の性格を持っています。ヘブライ人へ書かれた手紙なので、旧約聖書の引用がたくさん出てきます。このころの聖書は旧約聖書です。著者は、聖書を良く知っている人たちを相手にして、救世主であり神の子であるイエス・キリストのことをしっかり説明しています。

旧約の祭司と大祭司であるキリストの違いを述べている以下の箇所は、十字架上のイエス・キリストを考えると参考になると思います。

「すべての祭司は、毎日礼拝を献げるために立ち、決して罪を除くことのできない同じいけにえを、繰り返して献げます。しかしキリストは、罪のために唯一のいけにえを献げて、永遠に神の右の座に着き、その後は、敵どもがご自分の足台となってしまうまで、待ち続けておられるのです。なぜなら、キリストは唯一の献げものによって、聖なる者とされた人々を永遠に完全な者となさったからです。」10章11節～14節

キリストの十字架上での奉獻によって、旧約の不完全な献げ物は廃止されました。献げ物の本来の目的は、神に立ち帰り罪から清められることでした。イエスの十字架が永遠の完全な物として、それを実現したのです。この箇所は11月18日の主日に読まれました。



新年明けた1月19日(土)に林尚志神父(イエズス会)指導の黙想会には25名の参加がありました。林神父の熱弁と参加者の目の輝きが会場にあふれ、温かい雰囲気を超え、篤い思いが全体をおおいました。

テーマは「きっと来る! 信仰年を生きる」です。転んでもころんでも、ぺちゃんこにされても、大丈夫だよ、きっと来る!という信仰、實際を超えて、神の働きがあって、きっと来る!という信仰を生きていくことだと。

神の国=天とは、わかちあいの極み、愛、正義、平和の行きわたった状態のことなのです。差別、収奪、独占、不平等といった、およそ神の国=天と反対の状態ばかり見えてくる現代のただ中で、{あなた方の間に、神の国=天がすでに始まっていますよ}というイエスの神の国宣言は、希望と喜び、力強さのメッセージそのものです。・・・と身体全体を使って話されました。

派遣のミサでは、洗礼を受けていらっしゃらない方も祝福を受け皆がひとつになり、神の国がすでに始まっていると信じ、希望の光を感じる時でした。

報告者: ペルーの貧しい子どもを支えるレプトン会 岩本ナセ(遠賀地区)



今月の聖人 7日 福者エウジェニ・スメット(み摂理のマリア) 修道女

1825年-1871年

エウジェニは、フランス、リールの信仰深い家庭に生まれた。あるとき祈っていると「清めの教会の魂の救いのために神の道具になるように」との神からの促しを受けた。それ以来エウジェニは修道生活への望みを持ち、祈りと犠牲をもって時がくるのを待った。

そして「練獄の靈魂の会」という信心会を作り、1856年に「練獄援助修道会」(現在の「援助修道会」)を創立した。そして数名の同志とともに聖イグナチオの会則に従い「神の栄光と練獄の靈魂のために祈り、苦しみ、働く」ことを目的とし、パリの貧しい一室から活動をスタートした。病人の看護、キリスト教要理教育、施設などの事業へと会は発展していった。

同会は1935年来日し、東京、広島、北九州などで、幼稚園、老人ホーム、寮、黙想の家を運営し、司牧、看護、教師、ケースワーカーなど、社会のただ中であってその使命を果たしている。





## ★子ども達が集めた募金★

46,934円

カリタスジャパンへ 26,934円

美野島司牧センターへ 10,000円

水巻町社会福祉協議会へ 10,000円

ご協力ありがとうございました。

## ★灰の水曜日 ミサ★

日 時：2月13日(水)

午前9時30分・午後7時30分

## ★野菜の寄付★

12月に芦屋地区の原田さんより、たくさんの野菜を頂きました。ありがとうございました。

## ★新しい本『石が叫ぶ福音』★

昨年2月号で紹介した「石が叫ぶ福音」(著者 林尚志神父)の本を購入しました。図書室に置いてありますので、ご覧ください。

## ★外国人セミナーのお知らせ★

難民移住移動者委員会の主催で、長崎教会管区の外国人セミナーが開かれます。今回は東日本大震災に遭遇した外国人信徒の現状について、現地から司祭と信徒が来て話をします。外国人だけでなくたくさんの方の参加をお待ちします。

日 時：3月10日(日) 14時より

終了後、英語ミサがあります

場 所：大名町教会

※参加費は要りません。

人-ひと

【転入】ようこそ！水巻へ

◇大水 敏広さん

新田原教会より折尾地区へ

【転出】お元気で！

◇中田 サヨさん(芦屋地区)

黒崎教会へ

折尾地区

西山寿美枝さんの短歌

老いをひき一歩一歩と歩く今日

つまずきし石そつと拾いぬ

如月の風に紅梅散りいそぎ

あら草の中に紅をのこしぬ

古木にも梅の白きが点々と

咲きてみ空の蒼きに吸われる

空洞になりても老木は枝のぼし

白梅の花優雅にかおる

如月の寒き一日を老木は

梅の一輪浄く咲かせり

朽ちかけし梅の老木の根元には

小石や芥のありて哀しき